

「関節リウマチ」進行すると骨が破壊され変形

「体質」と「環境」視点が大切

九州大病院別府病院の治療・研究

からだを
読み解く

▶ 18 ◀

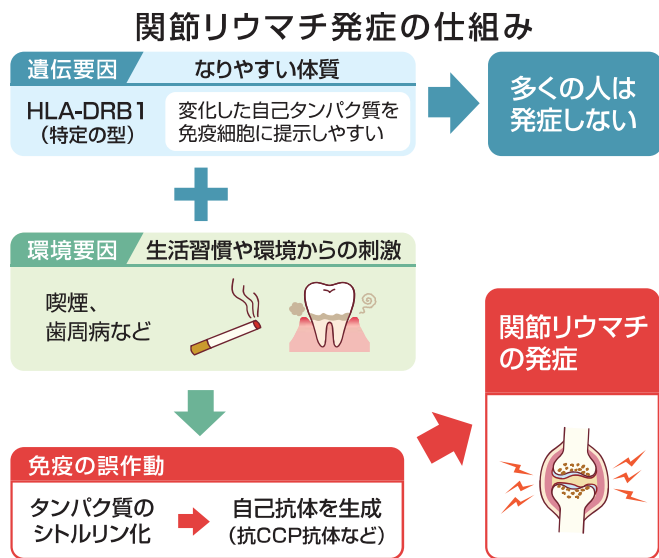


内科助教
おしお よしおし
押領 司 大助

関節リウマチは、関節が腫れて痛み、進行すると骨が破壊されて変形してしまう病気です。背景には「自己免疫」と呼ばれる現象があります。本来は細菌やウイルスを攻撃するはずの免疫が、自分の体を敵と間違えてしまうのです。その背景を考えると、「体質」と「環境」の二つの視点が大切です。

まず体質とは、遺伝要因のことです。白血球の表面には「HLA」というタンパク質があります。これは、外から入ってきた細菌やウイルスなどを免疫細胞に外敵と知らせる「名札」のような働きをしています。このHLAを決める遺伝子のうち、HLA-DRB1という型の一部を持つ人は、

喫煙、歯周病も高リスク



関節リウマチになりやすいことが分かっています。ただし、この遺伝子型があっても、多くの人は一生関節リウマチを発症しません。遺伝子はあくまで「なりやすい土台」を作るものに過ぎず、それだけで病気が決まるわけではありません。

次に環境要因ですが、最もはつきりしたものは喫煙です。たばこの煙は肺の粘膜に強い刺激を与え、そこでタンパク質の形を変えてしまいます。この変化を「シトルリン化」と呼びます。シトルリン化を受けた自分のタンパク質に対して、体は「これはおかしいものだ」と判断し、攻撃するための抗体(抗CCP抗体など)が作られやすくなります。こうしてできた自己抗体は、症状が出るかなり前

から血液中に現れ、時間をかけて関節の炎症を起こす引き金になると考えられています。さらに、喫煙の習慣があり、先ほどのHLA-DRB1のリスク型も持っている人では、この流れが起こりやすくなることが報告されています。つまり、「なりやすい体質」と「たばこ」という環境要因が、掛け算のように重なることで、関節リウマチの発症リスクが高まると考えられます。

最近、口の中や腸内の細菌との関係も注目されています。歯周病の原因菌の中には、人のタンパク質をシトルリン化しやすくするものがあり、自己抗体が生まれるきっかけになる可能性があります。さらに、食生活の欧米化や肥満、大気汚染なども、免疫のバランスを崩す因子と考えられています。

このように、関節リウマチは「なりやすい体質」の上に、「生活習慣や環境からの刺激」が積み重なることで発症します。体質そのものは変えられませんが、禁煙や歯周病の治療、適切な体重管理などは、発症リスクを下げる一助になると期待されています。

＝ 終わり ＝